

令和6年度 第2回不登校の子どもを支える保護者のための情報交換会

「生活の中での子どもの成長」

山梨大学教育学部附属教育実践総合センターでは、山梨県教育委員会と連携し、「生活の中での子どもの成長」をテーマに田中健史朗先生によるセミナーを行い、同年代の子どもをもつ親御さん同士の活発な意見交換を行いました。今回は田中健史朗先生が不登校の子どもたちに関する様々なエビデンスを示しながら保護者の方が学校の現状を理解できるようなお話をいただきました。子どもと日々の生活の中で取っていかばよいのかどのようにコミュニケーションをとることについて具体的に示していただきました。日々の生活の中でポジティブ感情の送受信をしていくことが子どもの無力感を軽減していくということをご説明いただき保護者の方がお子さんとのコミュニケーションを見直すきっかけとなったと思います。

参加された保護者の方も熱心にメモを取りながら聞き入っておられ、セミナー後に個別に質問に来られるなど活発な交流がみられました。参加人数が少なかったこともあり、情報交換会では小中2グループに分かれて行うことができ、県教委の先生への質問も多岐に渡り、具体的な現状や対応策についてご助言いただきました。

情報交換会が終わっても保護者の方々が熱心先生方に質問されている様子が印象的で、「不登校の子どもを支える保護者のための情報交換会」が保護者の方々のつながりや支援の輪を広げる一助になっていると思われました。

1. 実施日

2025年3月3日（月）

10:30～12:30（受付10:00～）

2. 場所

山梨大学甲府キャンパス L号館C棟1F LC-15教室、LC-17教室
（甲府市武田4-4-37）

3. 参加者

12名の申し込みがあり、9名参加

4. 今後の課題

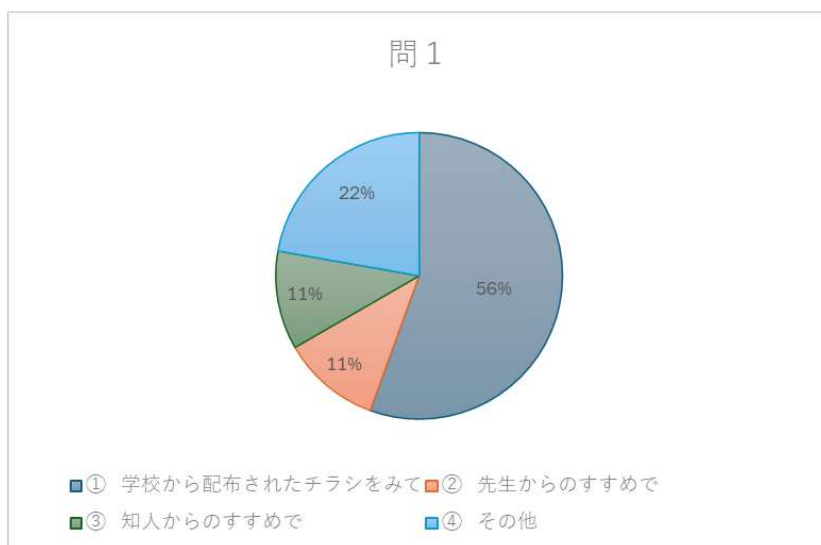
参加された方の満足度は非常に高いのですが、参加者が少ないという問題があります。必要とされている保護者の方により広く届けるための工夫が必要であると思われます。

来年度から周知方法を見直す、開催日を工夫するといった事を取り入れ改善していきたい。

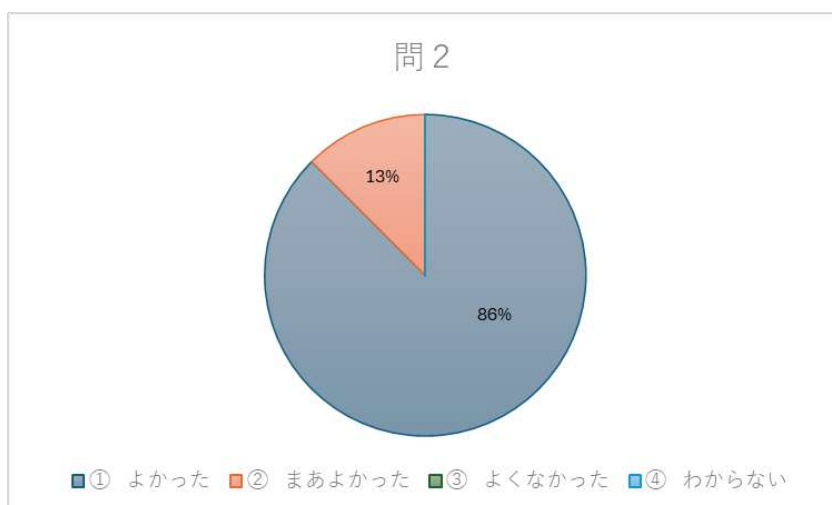
アンケート結果

問1 本会の開催をどのようにお知りになりましたか

- ① 学校から配布されたチラシをみて 5名
- ② 先生からのすすめで 1名
- ③ 知人からのすすめで 1名
- ④ その他（こころの発達支援センター/県教委チームズ）2名



問2 本会に参加していかがでしたか



問3 今後の情報交換会のテーマや日程についてご希望があれば

- ・不登校の子どもたちの進路、その先など県内の子どもたちの具体例を知りたい
- ・朝起きられない、おきたくても起きられない子供へのアプローチの仕方。
- ・病院やメンタルクリニックでは対応いただけない。
- ・土曜日希望/土日が良い
- ・タイミングにあった支援について具体的に知りたいです。わが子がどここの欲求を満たしているのか客観的に見てほしいです。
- ・また同様の会を開いて欲しいです。

問4 不登校の子どもを支える上でどのようなサポートはあったらいいでしょうか

- ・校内にサポートルームが欲しいです。(心の保健室のような)
- ・学費の減免など。学校に払っている金額を他のサポートに回したい(やりたいという習い事や教材など)。
- ・どうすればよいか、どうあればよいか不安がある。先生以外にも相談できる場所があれば助かると思いました。
- ・今回のような不登校の子を支える親を支える機会がいい
- ・もうすでにあるのかもしれませんが、相談窓口の一覧表。定期的な個別相談の場(子どもの様子に応じ、家庭でも支援方法の助言が欲しい)学校の先生への不登校児のサポートのための講習。
- ・自立に向けて今日の講演のように動く一方、根本解決も進めないと不登校が減らないと思うので、教員の現状認識と意識改革をする教員への教育。教員の質を上げるため、子どもの教員への評価(現状)をする機会を作る。
- ・シングルマザーに対する見守りや家事支援
- ・公立学校でオルタナティブスクールを設置し、学区制によらない学校選択を可能とする(広島県のように)

問5 本日のセミナーや情報交換会のご感想

- ・休みの過ごし方や目標に向かったの明確な親としてのかかわり方を考え直すことができた。
- ・それぞれに抱えたものがある中で、共感したり、参考になったりして過ごせました。
- ・田中先生の子どもたちや親に責任はないという言葉にホッとしました。
- ・苦しい日々の中、今家で笑顔でいてくれる子どもを信じて楽しい共通点をたくさん見つけていきたいと思いました。また参加したいです。ありがとうございました。
- ・新しい取り組みとして google meet の授業の受け方など受け取れました。
- ・本人とのかかわり方もお話することができてよかったです。ありがとうございました。
- ・不登校のきっかけの資料にある生徒の最多理由対象不良や不安について深掘した内容を知りたいと思った。また生徒や保護者と教師とで大きくズレがあるものについて教員の理解を進めるといいと思った。

第2回やまなし情報教育推進室フォーラム開催報告

やまなし情報教育推進室

令和7年3月6日午後5時から午後7時まで第2回やまなし情報教育推進室フォーラムが開催されました。山梨大学甲府西キャンパスJ号館A会議室及びZoomを使ったオンラインのハイフレックス方式での開催となりました。

やまなし情報教育推進室は、山梨県をはじめとする小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の情報教育の一層の充実と振興を図るため、山梨県教育委員会と連携して令和5年10月1日に教育学部附属教育実践総合センター内に開設した推進室となります。その推進室が主催する第2回目のフォーラムでした。

今回のフォーラムは、「教育の情報化の現在とこれから」と題し、小・中・高校の情報活用能力の系統性を考える内容で構成されました。我が国の教育DX・情報教育をリードする堀田龍也氏（東京学芸大学教職大学院・教授、学長特別補佐）を講師に迎え、教育の情報化に関する最新動向についてご講演をいただきました。また、堀田龍也氏は中央教育審議会・委員をお務めであることから、これから求められる資質・能力や授業の在り方についてもお話をいただきました。

フォーラムの後半は、情報活用能力の育成に関する小・中・高の実践発表、パネルディスカッションが行われ、校種間連携の大切さや発達段階に応じて情報活用能力を育成していくことの必要性について考える機会となりました。

プログラム

時刻	内 容
17:00～ 17:15	・開会の挨拶、 ・やまなし情報教育推進室についての紹介、 ・オンライン研修動画（高校編）の紹介
17:15～ 18:00	基調講演 「2nd GIGA 時代 これから求められる資質・能力、授業の在り方とは」 堀田 龍也 氏（東京学芸大学教職大学院・教授、学長特別補佐）
18:00～ 18:25	情報活用能力の育成に関する小・中・高の実践発表 池田 理恵子 氏（甲州市立塩山南小学校・教諭） 今村 裕樹 氏（甲斐市立敷島中学校・教諭） 稲垣 俊介 氏（山梨大学・准教授／元 都立高校・主任教諭）
18:25～ 18:55	パネルディスカッション「情報活用能力の系統性を考える」 （進行 山梨大学・准教授 三井一希） 堀田 龍也 氏（東京学芸大学教職大学院・教授、学長特別補佐） 池田 理恵子 氏（甲州市立塩山南小学校・教諭） 今村 裕樹 氏（甲斐市立敷島中学校・教諭） 稲垣 俊介 氏（山梨大学・准教授／元 都立高校・主任教諭）
18:55～ 19:00	クロージング

■申込者数 対面参加：39名、オンライン参加：211名 合計 250名



■講師 堀田龍也氏の基調講演

2nd.GIGA 時代の教育改革、情報活用能力の重要性、1人1台端末を活用した授業改善等について、具体的にお話をいただきました。「これからの時代は学びに強くなければならない。そういう子を育てなければならぬ」という力強いメッセージもいただきました。最新のトピックを織り交ぜながら、優しい語り口調でたいへん分かりやすいご講演をいただきました。



■やまなし情報教育推進室の活動紹介

長谷川千秋推進室長から、やまなし情報教育推進室の活動内容について説明を行いました。推進室では、高等学校「情報」免許法認定講習の実施、教員向けオンライン研修コンテンツの開発と展開、ICT 支援員の学生版である「ICT 支援学生」の養成と附属小中学校への派遣、今回のようなフォーラムや Web ページを通じた情報発信等を行っていることの紹介がなされました。



■小・中・高の実践発表

情報活用能力の育成に関する小学校、中学校、高等学校の実践発表が行われました。年間を通じて、どのような力をつけるために、どのような指導を行っているのかについての具体的な発表がありました。小・中・高の実践を並べてみることで、例えば小学校の実践が中学校や高等学校でどのように生かされるのかについての理解を深めることができました。



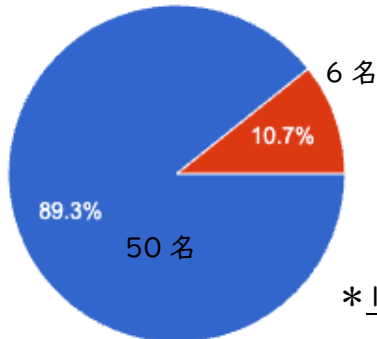
■パネルディスカッション

「情報活用能力の系統性を考える」とのテーマでパネルディスカッションが行われました。まずは、パネリストの実践発表に対する堀田先生のコメント、パネリストが他者の実践発表についてどのように感じたかの感想を交流しました。その後、参加者から出た質問を取り上げ、ディスカッションを行いました。設定時間には収まり切らないほど白熱した議論が繰り広げられました。

【参加者へのアンケート結果】

● アンケート回答者数 56 名

① 今回のフォーラムの満足度を教えてください



1 満足した	50 名 (89.3%)
2 まあ満足した	6 名 (10.7%)
3 どちらともいえない	0 名 (3.6%)
4 あまり満足しなかった	0 名 (0%)
5 満足しなかった	0 名 (0%)

* 100%の方が満足した・まあ満足したと肯定的な回答

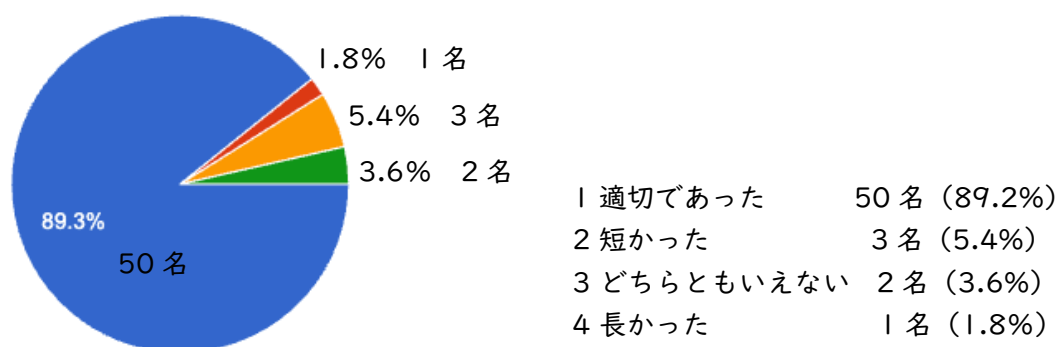
② ①の回答の理由を教えてください（抜粋）

- ・ 小中高の発表を拝見するなかで、本校・本町の進捗状況を確認できた
- ・ 情報活用能力について、系統的に具体的に知ることができた
- ・ 次期学習指導要領について方向性を知ることができた
- ・ 堀田先生のお話が聞けてとても刺激になった
- ・ これからの ICT の活用について見通しが持てた
- ・ 堀田先生の講演はもちろん、小・中・高と揃った実践発表とパネルという構成がよかった
- ・ 市内で ICT の活用を推進しているが、大切だと感じていることを改めて確認できた
- ・ 2 時間という短い時間にも関わらず充実した内容のフォーラムであった
- ・ 理論と実践の両面からの話を聞いた

③ 今回のフォーラムに参加された感想を教えてください（抜粋）

- ・ 今回、山梨県教育委員会と大学が連携して取り組む仕組みは大変参考になりましたし、今後、このような取組が増えることが求められるなど感じました。今後も山梨県の取組から学ばせていただけたらと思います。
- ・ これからの 2nd GIGA の時代にどのように授業づくりを考えていくのか、背景と実践との両面から考えることができ、とても学びの多い時間となりました。
- ・ 情報活用能力の向上は喫緊の課題であると感じた。教育課程の編成を行なっている中でも問題になったので、確かに情報活用の実践力を高め、充実した教育活動になるための基盤を作っていきたいと感じた。
- ・ オンラインの参加形式がありがたかったです。発表者や運営の方々の皆様、ありがとうございました。
- ・ ICT を活用した授業が入ってきても、普段からの学級経営が大切であることがお話の中から、実感できた。多様な子供たちに対応し、各自に力をつけるためにも、自分自身の ICT 活用能力を振り返りながら学び足していきたいと思った。「子供に委ねる授業」というと、「教師は一切教えない、一斉授業はしない」ととらえる方々がおり、悶々としたことがあった。そうではなく、「教えるべきことは教える」ということ（学級経営においてもだが）がお話の中で何度も出てきたので、これまでの自分自身の取り組みに自信を持つことができた。
- ・ 参加できて大変勉強になりました。発達段階に応じた使用方法や目的が具体的で分かりやすかった。

④ 今回のフォーラムの時間設定（２時間）について教えてください



⑤ やまなし情報教育推進室のフォーラムで今後取り上げてほしいテーマを教えてください

（抜粋）

- ・ こども主体の授業と情報活用能力
- ・ 生成 AI の教育現場での利活用
- ・ 情報活用能力育成を目指した授業づくりの具体的な提案
- ・ デジタルシティズンシップ教育について
- ・ 特別支援の児童や発達障害の児童に対する効果的な I C T 活用方法
- ・ 個別最適な学びに特化した内容
- ・ パフォーマンス評価を行いながらどう ICT を活用するか

やまなし情報教育推進室では今後もこのようなフォーラムを開催していく予定です。
最新の情報は WEB ページからご確認ください。

<https://www.yamanashi.info/>



「地域学習アシスト事業」の令和6年度の活動の概要について報告します。

I 概要

- 1 目的 「新たな課題に対応できる実践的な能力を身につけた教員の養成」
- 2 方針 「学校現場の課題を学校と大学が共有し、協働して解決策を探る」
 - (1) 学校現場の教師にとっても教員を目指す学生にとっても、双方にメリットがある事業にしていく。
 - ① 学校は、各学校の実情に応じ、自校の課題の解決に向けた取組をアシストチームと行うことにより、よりきめ細かな指導の充実を進め、より良い教育の実現を図る。
 - ② 学生は、これまでの教育ボランティア活動を深化させた子どもとの関わり方を通して、自身の指導方法や子ども理解を深める活動の機会にしていく。
 - (2) 多忙な学校現場に、できる限り配慮した取組にしていく。
- 3 特徴 【教育ボランティア活動をベースに、その発展形となる新たなアシスト活動】
学校現場の課題解決に向けて、
 - (1) チームカンファレンスを中心とした活動であること
 - (2) 学校の方針（要望）に基づいた、観察／記録－分析／相談－方針・計画立案－実施というサイクルで行う活動であること。なお、サイクルのどの段階から始めるかは、学校とアシストチームとの相談の上決める。

「地域における学校の実情による課題の解決に向けて、学習支援を中心に、
学校をチームでアシスト」

II 実施方法

1 チームカンファレンスを中心とした活動

これまでの成果と課題に基づいて、前期は、学校の要望に応じて課題に対する必要な支援を行い、アシスト先の学級の実態をつかむこと、教員や子どもたちとの関係づくり（信頼関係づくり）に努める。後期は、カンファレンスを伴ったアシスト活動に移行する。

○支援（受入）校 甲府市内小学校4校

(A 小学校・B 小学校・C 学校・D 小学校)

・教育ボランティア受入校であること、地理的な条件等を考慮

○アシストチームについて

・教育実習や教育ボランティアを経験した4年生7名、3年生1名、教員4名 合計12名

・A 小学校チーム学生2名、B 小学校チーム学生2名、C 小学校チーム学生2名

D 小学校チーム学生2名

・学校現場の課題に対して、教育ボランティア活動をベースとしつつ、学校の状況に即して適切な支援を行う。

○アシストの頻度について

・週1回2コマ、A小・B小 ～水曜日の5・6校時、

C小・D小 ～水曜日の3・4校時

・それぞれ授業終了後、担任の先生との情報交換等を行い、その後大学に戻り、カンファレンスを行う。（アシストB）

○カンファレンス（後期）について

- ・水曜日（17:00～18:00） ・全体会と分科会の持ち方は、昨年度と同じ
- ・11月27日（水）のカンファレンスを、学生と教員のみで開催した。学生相互の情報交換の場が欲しいという反省を受けて昨年度より実施した。

○アシスト活動①、アシスト活動②、及びカンファレンス（前期・後期）について

- ・アシスト活動①（前期） 12回実施。 ・カンファレンス 5回実施。
- ・アシスト活動②（後期） 11回実施 カンファレンス 12回実施。

○カンファレンスメンバー（主に分析等に関わる）23名

- ・教職大学院生（M1 ストマス 1名、M2 ストマス 6名、M1 現職教員 7名）合計 14名
- ・大学教員（実務家 2名＋アシスト担当教員 5名＋部門長 1名＋センター長 1名）

合計 9 名

○単位認定については、「学校支援実習（地域学習アシスト）Ⅰ～Ⅵ」として、30時間以上の活動等の要件を満たした場合 1 単位（年間最大 2 単位）取得でき、今年度は 2 月 13 日（木）の教職支援部門会議（メール会議）において、アシスト学生の 1 名に「学校支援実習（地域学習アシスト）Ⅰ」が、5 名に「学校支援実習（地域学習アシスト）Ⅰ・Ⅱ」が、2 名に「学校支援実習（地域学習アシスト）Ⅴ・Ⅵ」が認定された。

Ⅲ 成果及び課題

1 アシストチームの学生のふり返り（OPPシートから）

学生 A

「子どもたちの言動の背景を考える」ということは大切なことで怠ってはいけないことだと実感した。初めは子どもたちとどう接すれば仲良くなれるかということばかり気にしていた。地域アシストを通して子どもたちの行動が見えてくると、「あの時どうしてあんなことを言ったのか、どうしてあんなことをしたのか」考える機会が増えていった。そして、その後のカンファレンスで先生方からアドバイスをいただいたり、その出来事が起こった時の様子を振り返ったりする中で、子どもたちの背景を考える癖がついていった。この習慣は、4月から教員として働く際に必ず必要になっていくものだと思う。私は、子どもたちの些細な変化に気づけるように、日ごろから子どもたちの表面上の言動にとらわれず、「なぜ？」を日々考えることができるような教員でありたいと思った。

学生 B

地域アシストを通して、最初は同じような声掛けなど、画一的な支援が多くなってしまっていました。しかし、毎週の活動の中での子どもたちの反応やカンファレンスで学んだことを意識しながら、様々な支援のアプローチを試し、改善を続けることができました。例えば、褒める時には単に声をかけるだけでなく、ジェスチャーを使ったり、一人ひとりの良いところを具体的に褒めたりすることを心がけるようになりました。4月から教員として働く際にも、子どもの行動の背景を理解して寄り添っていくという自分自身の軸を大切にしながら、担任としての子どもたち



との関わり方や授業の進め方について、他の先生方からのアドバイスをいただきながら改善し続けることを大切にしていきたいです。

学生C

地域アシストを通して、特に成長したと感じているのが、「褒め方のバリエーション」です。アシスト前半では積極的に褒めようとしても声かけがワンパターンになってしまうことが課題としてありました。そこからカンファレンスでアドバイス・ご意見を頂いて、その行動の何が良かったのか、どんな声かけが周りの児童にも良い影響を与えられるのか等、その児童にあった褒め方は何かを意識するようになり、より伝わりやすく児童に良さを伝えることができるようになりました。また、昨年度も2年生の学級に入っていましたが、児童によって学級・児童の課題が全く異なることを改めて強く感じました。教員となっても、得た学びを活かして、目の前の児童一人一人の今としっかり向き合うことを大切にしていきたいです。

学生D

大学の先生方や大学院の方々に、自分の悩みをお話すると、私自身の子どもの言動の背景の見方が増えたり、多様な支援の方法を知ることが出来たりして、自分の視野を広げることができた。今後、子どもとのかかわり方を考えるときには、一年間アシストで学んだことを思い出ししながら、まずは自分で考えるが、周りの先生方に相談して、たくさんの視点を持つことも大切にしたい。

学生E

地域アシストを通して、児童との関わり方について多くのことを学んだ。特に、児童が望ましくない行動をとった際に、否定的な言葉を使って指摘するのではなく、良い行動を見つけて積極的に褒めることの重要性を実感した。例えば、「それはダメ」と注意するのではなく、「こうするともっと良くなるね」といった肯定的な言葉がけを意識することで、児童が自ら望ましい行動を取ろうとする姿勢につながることを学んだ。

学生F

「アシスト」をする立場として、今まで行った教育実習や教育ボランティアとは少し違う視点を持ってクラスに入ることが出来た。その中で、クラスに応じて児童も違うし、抱えている課題は異なるが、教師としてどのように子どもと関わりたいのかというイメージを持つことは、どの学級であっても共通して役立つことであると思った。今までは、児童との関係性をつくる＝児童と積極的に話しかけるのだと思っていた。もちろん、それは大前提とても必要なことだと思うが、児童1人1人、話すのが得意な子もいればそうでない子もいるため、コミュニケーションが上手に出来ないこともあると思う。そうした中で、言葉以外のやり取りを見つけたり、学級全体の中で児童のよいところを共有したりして、児童との関係性を築いていけるようにしたいと思うようになった。

学生G

この活動を通して、子どもたちの小さな成長を見逃さず、その変化を大切にする視点がより強くなったと感じている。日々の積み重ねが、子どもたちを大きく成長させていることに改めて気づかされた。また、児童同士が助け合う姿を見て、思いやりの大切さを再認識するとともに、私自身も相手の気持ちに寄り添う意識がより高まった。さらに、先生方の対応や学級経営を観察する中で、子どもたちの発言や気持ちを丁寧にくみ取ることの重要性を改めて学び、自分もそうした姿勢をさらに身につけたいと思った。限られた時間の中でも、子どもたちと関わりをひとつひとつ大切にしていきたい。

学生H

今年1年間の地域学習アシストを通して、子どもひとりひとりを見る力がついたと思います。これまでのボランティアでは、学習面をサポートしようと考えてきましたが、小学1年生は学習面をサポートすることはもちろん、生活面をサポートすることも多かったです。生活面の支援をするにあたって、その子がどのような性格で、どのような背景を抱えているかを考えなければいけないと気づき、それを知ろうと行動を起こすことができるようになりました。また、小さなことでも先生方と報告や相談をすることの大切さを学びました。気になることを先生に報告し、先生が学級全体に対して働きかけたことで改善する場面が見られました。他の先生から注意されることで冷静に自分の行動を振り返ることができ、子どもにとっても教員にとってもよいと感じることができました。

2 アシストメンバー・カンファレンスメンバーのふり返しから（アンケートより）

（1）成果と感じたこと

学生

○今まで教育ボランティアや、教育実習を経験した中でわからないことや、児童に対してどのように接したら良いのか迷う時があったが、カンファレンスを通してその疑問が解消されたのが良かった。また、学級の課題を基に、その課題を解決するためにアシストとしてどのような支援を行うべきであるのかを考えたり、もし、自分がこの学級の担任であったらどのように対応するのかという視点を持ったりすることが出来た点が大きな成果だと思う。

大学院生（現職）

○自分が学生のことから、このような活動（学生のうちに現場を経験できる、実践をもとに困り感を話し、アドバイスをもらえる、現場の先生からのアドバイスをもらえる、つながりを作れる）があればいいなと感じていたので、実現されていて良かったです。私たちもこの機会を通して先生方の考えや知見を教えていただけてありがたかったです。

○各学校へのアシスト活動がとても有意義であると感じていました。アシストを行ってきた学生さんがとても熱心で向上心があること、課題の見取りを行う力があることが大変素晴らしいと感じました。また、それを次回に生かす姿勢も良かったです。そのやってみた結果を知りたいとも思いました。アシストさんが振り返りの時に年度初めの様子を思い出す姿があり、子どもの成長を実感している様子が見られました。今後、教員として活躍される際に必ず役に立つと思いました。また、相談するという経験を重ねられたこともいいと思います。

○学生や教員、大学の先生方と一緒に、実際の課題や困り感について共有できたこと。

○様々な、立場の方が参加し、アシスト活動について多面的な話ができて良かったです。

大学院生（ストマス）

○学部生のみなさんの教師力が高くて驚きました。

児童に寄り添ったアシストができていて素晴らしいと思いました。現場の空気が嫌にならないことを祈ります。

○私自身山梨大学出身ではなかったので、アシストの協力願いが出された時から楽しみにしてい

ました。また、参加してみると学部生の子たちが一生懸命短い時間でも児童たちと関わり、寄り添いながら試行錯誤している姿に胸をうたれました。大学院生として助言できる器ではなかったと思いますが、同じ教師を目指す仲間として様々な考え方や価値観を交流出来ました。学部生の方の熱意に背中を押され、私自身も来年教壇に立つ者として責任や自覚が芽生えました。とても半年間かつ参加した回は少なかったですが、充実した時間となりました。

(2) カンファレンスを通しての学び

学生

- 子どもの言動の背景には何があるのか探ることが大切であると学んだ。そのためには教師が子どもの目線に立って、子どもとの関係を築くことが必要であると思う。「どうしてこの児童は、こういう行動をするのか」「どうして授業中にざわざわしてしまうのか」など、自分の中で背景を整理して、解決方法を探していくことが大切であると思った。
- また、子どもとの関係づくりと一口に言っても、学級には様々な特性を持つ子がいることを踏まえて、1人1人に合った方法で子どもとの心理的な距離を縮めていくことが大切であると思った。

大学院生（現職）

- 学生さんたちの悩みや困り感、学生さんを通した児童の困り感について自分の経験や知識をもとに考えることで、貢献できたと感じられたこと。また、学生さんに伝わるように考えて話すことで自分の思考や経験を整理することができたこと。
- このような視点をもって日々先生方が悩み、相談をしたいと思っていることを知り、（逆にそういう場があるから課題意識を持って児童に関わろうとするのだと思いますが）、視点を与えること、それをみんなで語り合えるようにすることは、職員の同僚性、協働には大事だと感じました。
- 学校にとってもありがたいものであると思います。また、これから、教員になる学生にとっては、大変ですが、とても学びが多いものになると思いました。
- それぞれの立場からの率直な対話を通して、活動について語り合い、実践に結びつけられたことは素晴らしい取り組みだと思いました。

大学院生（ストマス）

- 経験を積み重ねると、初心を忘れがちになります。若いときに悩んだことを思い出すのにとっても良い機会でした。
- カンファレンスを通しての学びは、自身の行動や声掛けを客観的に判断出来ることだと考えます。それは学部生が一番学びがあることかもしれませんが、私たち大学院生にも客観的に見る事の重要さを痛感することができました。

(3) 「地域学習アシスト」を継続していく上での課題

学生

○課題は特にはないですが、週1回であると、子どもと接する時間が短いように思う。教育実習
教員採用試験、卒論と忙しい時もあるので、行く回数を増やすのは難しいと思うが、任意で、
週2くらいアシストを行うようにしても良いかもしれないと思った。

大学院生（現職）

○時間的になかなか現職の参加が難しいところ（仕方がないのですが…）

○アシストに行った日で、教授陣の都合も考えるとこの時間帯が最適だとは思いますが
時間の設定は今後の課題かと思います。5限があって参加ができなかった現職もありました。
遠方で参加しにくい人もいました。一方で「一回でもいいので参加を」という呼びかけは
大変ありがたく、それで参加をしていた人もいました。

アシストを受け入れてくださる学校も貴重です。定期的に入ることは学校も負担に感
じることがあるかもしれません。継続的に行えるように、これからも良好な関係を築いて
いって欲しいと思います。これは先生方の尽力のおかげだと思っています。児童にとって
は大学生が定期的に来てくれるのは楽しみだと思います。

○参加者が多くなるとよいと思いました。（私もほとんど出ていないのにすみません）

大学院生（ストマス）

○私を含めて、大学院生が参加できていないのが課題となると思います。すみません。

（４） その他、感想・意見・要望等

学生

○現職の先生や、大学の先生、学生等と、様々な課題や事例を取り上げて話し合ったり、解決
策を聞いたりすることが出来て、とても貴重な時間を過ごすことが出来た。より実践的に、実
際の現場に近い形で学ぶことが出来たと思う。

大学院生（現職）

○貴重な経験、学びの機会をいただき感謝しています。ありがとうございました。

○学生さんたちが今後現場でご活躍されることを願っています。

自分自身たくさん学ばせていただき、感謝しています。変なことを話していないか、アシ
ストをする学生さんにマイナスになっていないか心配もありましたが、しつこく参加しました。
ご迷惑でなかったらよかったのですが。

参加する私たちのような現職を更に指導していただけたら、現場に戻っていい関わりができな
いと思います。アシストされている学生さんから「この意見はきつかったー」とか「こう言われ
たからがんばれた」という話も逆に聞いてみたいです。

○ほとんど出席できず、申し訳ありませんでした。

大学院生（ストマス）

○大学院の提出物の関係で、予定していたアシストに参加できないことがあり、申し訳なく思っ
ています。温かい雰囲気はとても居心地が良かったです

○少ししか参加できなかったのですが、とても充実した時間となっていました。来年度ももしあれば積極的に参加したいです。



Ⅳ 全体としての成果と課題

(1) 成果

学生の成長、教育ボランティアから地域学習アシストへのステップ、学校現場との課題の共有、カンファレンスメンバーの学びの機会、事業成果パンフレット（5年間のあゆみ）の作成・配付、教大協及び教育学部FD研修会への成果発表、などがあげられた。

(2) 課題

カンファレンスの運営の工夫、持続可能な運用体制の構築（時期、日程、人的資源・組織体制）、学生と担任との打合せ会の設定、学校側の負担感軽減について、などがあげられた。

令和6年度制作のオンライン研修動画（高校編）についての報告

1. 背景と目的

高等学校「情報Ⅰ」が必修科目となり、大学入学共通テストへの導入が進められている中で、プログラミングやデータサイエンスを中心とする指導力の強化が求められている。

本学と山梨県教育委員会が協働して推進中の「やまなしメソッド」では、小学校・中学校・特別支援学校の学びと高校「情報Ⅰ」を連携させる視点を重視しており、本年度はその一環として、プログラミング教育およびデータサイエンス教育をテーマとするオンライン研修動画を作成した。

これにより、高等学校だけでなく、小・中・特別支援学校の教員や教育委員会などの研修で効率的に活用できる教材を提供し、校種間・教科間連携を促進することを目的としている。

2. 動画コンテンツの概要

作成した動画コンテンツのタイトルは「やまなしメソッドによる校種間・教科間連携を実現する『情報Ⅰ』の授業づくり」である。プログラミング教育とデータサイエンス教育をそれぞれ理論編、実践編として、各約15分で構成している。

理論編では、大学教員や指導主事が解説を行い、高等学校「情報Ⅰ」における基礎的知識や教育的意義などを整理している。実践編では、県立高等学校の教員が現場の具体的事例や授業展開のポイントを紹介し、実践的な内容を詳しく伝えている。

3. 制作体制

山梨大学 教育学部附属教育実践総合センター やまなし情報教育推進室

(1) 講師・出演

- ・プログラミング教育【理論編】：山梨大学教育学部准教授 稲垣俊介
- ・データサイエンス教育【理論編】：山梨県教育庁高校教育課指導主事 三枝和博先生
- ・プログラミング教育【実践編】：山梨県立青洲高等学校教諭 川崎康洋先生
- ・データサイエンス教育【実践編】：山梨県立日川高等学校教諭 加賀美昌宏先生

(2) 撮影・編集

テレビ制作会社（株式会社ファーストビジョン）

4. スケジュールと進捗

- ・令和6年9月下旬まで：講師とディレクターがスライド・台本を作成・確認
- ・令和6年10～11月：講義撮影（スタジオ収録）と一部授業実践映像の収録、編集作業
- ・令和6年12月～令和7年1月：テロップ・BGM・CG等の挿入、確認テスト問題の作成、最終チェック

- 令和7年1月末：動画完成・納品
- 令和7年3月：本学 Web ページで公開し、各研修機関へ周知

5. 各動画の内容

(1) プログラミング教育【理論編】

プログラミング教育の歴史的背景や教育的価値を整理し、「情報I」におけるプログラミングの位置づけを解説する。小・中学校で学習したプログラミング的思考がどのように高校段階で発展させられるか、小・中・高の連携事例を交えて紹介している。さらに、授業計画や学習目標の設定のポイント、事例研究で活用可能なリソースも示しており、教員が理論的根拠をもってプログラミング教育に取り組むための基礎を提供する内容となっている。



(2) データサイエンス教育【理論編】

データを収集・整理・分析し、結果を表現・評価する一連の流れを「情報I」の観点から整理。小・中段階の統計教育との関連や、データ活用が育む問題解決力・探究的な学びの重要性にも触れながら、高校での指導において意識すべき点を示している。さらに、データの可視化や情報モラルに関する基礎的知識を含め、多面的にデータサイエンス教育を理解できるよう構成している。



(3) プログラミング教育【実践編】

高校現場で行われている授業実践例を取り上げ、具体的な授業準備（教材や ICT 機器の準備など）から導入・展開・振り返りまでの一連の流れを示している。生徒が実際にプログラムを作成する過程やつまづきやすいポイントの対処、評価の方法などを映像とともに解説し、学習成果をどのように確認し、次につなげていくかといったノウハウも紹介。学校現場での実践をイメージしやすい構成となっている。



(4) データサイエンス教育【実践編】

具体的な授業の展開方法を紹介し、どのように生徒にデータを扱わせ、分析や考察を深めていくかを解説している。日常生活や地域社会に存在する課題を取り上げ、データを通じて問題の本質を見抜き、解決策を検討する授業事例を示すことで、生徒の主体的・協働的な学習活動が高まることを強調している。

評価やフィードバックの工夫も詳しく説明し、教員がすぐに参考にできる形となっている。



6. 活用方法

動画はすでに本学 Web ページに掲載済みであり、県内の小・中・高・特別支援学校等へ周知される予定である。初任者研修や中堅研修などの一環として取り入れるだけでなく、各学校の校内研修や個々の教員の自主学習にも活用可能である。1 本あたり 15 分程度の構成のため、研修や授業の合間に視聴しやすく、各動画の理解度を確認するための 3 問構成のテストも用意している。

7. 今後の展開

本年度に作成した動画コンテンツは、小・中・高・特別支援学校をつなぐ「やまなしメソッド」の視点から、高校「情報 I」の授業づくりを支える教材として位置づけられている。

今後は山梨県教育委員会による各種研修プログラムのほか、本学の教職課程や免許法認定講習などでの活用も想定している。加えて、前年度に制作した「やまなしメソッドによる個別最適な学びと協働的な学びを実現する ICT を活用した授業づくり」動画とあわせて使用することで、校種間・教科間を通じた情報教育の一層の充実に寄与することが期待される。

8. 参考資料（チラシ）

チラシを本報告書に添付する。A4 サイズ 1 枚にまとめており、以下の項目を掲載している。

- ・ 動画タイトル
- ・ 内容（プログラミング教育／データサイエンス教育それぞれの理論編・実践編）
- ・ 視聴方法（本学 Web ページの案内など）
- ・ 問い合わせ先（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター）

校内研修や各種研修会場において配布し、多くの教員に動画の存在と活用方法を周知できるようにする予定である。

やまなしメソッドによる校種間・教科間連携を実現する 「情報Ⅰ」の授業づくり

研修動画コンテンツ

プログラミング教育

理論編

実践編

データサイエンス教育

理論編

実践編



小学校・中学校
特別支援学校の先生方も
ぜひともご視聴ください。

動画の特徴

- ✓ 「情報Ⅰ」の重要分野である「プログラミング」と「データサイエンス」の解説
- ✓ 1回15分程度の動画で効率的に学ぶことができる
- ✓ 理論編は大学教員や指導主事、実践編は高等学校の教員がわかりやすく解説
- ✓ 校内研修で一斉視聴、空き時間に個別視聴など多様なスタイルで学びを応援
- ✓ 小学校・中学校・高等学校の連携と生徒の「自分ごと」を意識した授業実践を解説

利用手順

- ① 申込フォームから申し込む
- ② URL、ID、パスワードを入手
- ③ 動画を使って学ぶ



申込フォーム（随時受付）

お申込み
お問合せ

▼WEBフォームよりお申込みください

☎ 055-220-8325 ✉ edjissen-as@yamanshi.ac.jp

お問い合わせ 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター（事務室）